

夢を  
追つて

本当の  
ゴールは  
まだ遠く

夢を追い続ける大人たち。  
これまでの道のり、  
将来の目標、  
そして子どもたちへの  
メッセージを届けます。

# 体長約1mmの線虫を使い 多くの人へ安心できる未来を！

——株式会社HIROTSUバイオサイエンス 代表取締役 広津 崇亮氏

## 野球やテニスに 夢中だった少年時代

私が設立した会社「HIROTSUバイオサイエンス」は、線虫を使ったガン検査の研究を行っています。検査に使う線虫はもともと、土壤に生息する生き物で体長は1mmほど。鋭い嗅覚を持つています。

私たちは、この線虫がガン患者の尿に含まれる特定のにおいを好むことを突き止め、ガンの早期発見につながる検査の実用化へ向けた準備を進めています。

「子どもの頃から生き物が好きだったんですけど、なぜか？」

「生き物好きが高じて、線虫の研究にチャレンジしたんですか？」



●ひろつとかあき

- 1972年 山口県生まれ  
1991年 東大寺学園高校卒業後、東京大学理科II類に入学  
1997年 東京大学大学院理学系研究科生物化学専攻修士課程修了。サントリーに入社する  
1998年 サントリーを退社し、東京大学大学院理学系研究科生物化学専攻博士課程入学  
2001年 博士課程修了。博士(理学)取得  
2005年 京都大学大学院ポスドク研究員などを経て、九州大学大学院で教鞭を執る  
2016年 株式会社HIROTSUバイオサイエンスを設立

雑誌や新聞のインタビューではよく聞かれますが、実は生き物が特別好きだったわけではなく、研究者に憧れていたわけでもありません。

小学生の頃は、野球好きの普通の小学生でした。甲子園で清原・桑田のK.Kコンビが活躍する姿を見て興奮したのを今でも鮮明に覚えています。

両親はそこまで教育熱心ではなく、「勉強しろ！」と言われることはほとんどありませんでした。自分で必要だと思えば机に向かう子どもでしたから、親も敢えて「出ししようとはしなかったのでしょうか。ただ、私が「顕微鏡でいろいろな生き物を見たい」「甲子園で野球観戦がしたい」と言つたときはですね。そういつたサポートが好奇心アップにつながり、両親には深く感謝しています。

小学校卒業後は地元の公立中学校に入学し、部活で軟式テニスをやるようになりました。坊主頭の野球少年になりました。

もテニスの方が女子の子に注目されるかなと思って（笑）。学校の勉強は、理系が特別好きだったわけではなく、どの教科も万遍なく好きでした。

部活動が終わる中3からは塾通いをスタート。中1から通っている塾生とは歴然とした差があり、最初は苦労しましたね。ただ、基本的に何かを学ぶこと、新しい知識に触ることは好きで、必要とあらば何時間でも勉強できるタイプなんです。そして、努力を続けるうちに今まで解けなかつた問題が解けるようになり、点数にも反映され、ライバルとの差もうまっていく。それがうれしくて高校受験の勉強をがんばり、努力の末、東大寺学園高校に入学しました。

東大寺学園高校の自由な校風は、私の性格に合っていましたね。制服がなく、生徒の自主性が尊重される。その代わり、成績がダウンしても誰からも何も言われない。今は違うかもしれません、当時は補習もほとんどなかつた。だから、自分で何とかするしかない。中学までは上位の成績でしたが、高校生の最初の中間テストは真ん中にいました。だから、自分が何とかするしかない。高校時代から進学してきた東大寺学園中学から進学してきた生徒の中には、高1の時点で高校で学ぶ数学をほぼすべて理解しているような秀才がいて、そういう人たちと競い合つていかなくてはならない。私は部活にも入らず、お尻に火がついた状態で猛勉強し、次のテストからは上位へ

食い込むことができました。

高2からは進学塾にも通うようになったのですが、そこは東大寺

学園をはじめ関西の進学塾。私は数学だけを習っていたのですが、塾の先生の教え方がとてもわかりやすくて、初めて数学が好きになりました。

そこで、塾の先生たちが

も通うようになったのです。ですが、そこは東大寺

学園を通う生徒たちが集まる、知る人ぞ知る進学塾。私は数学だけを習っていたのですが、

高校卒業後の進路に悩む

理系の成績上位者は東大医学部を目指すのが当たり前。

当時の東大寺学園にはそんな空気があり、私も学校の先生から医学部受験を勧められました。ただ、学校の成績だけで医学部を目指していくものか迷ついて……。けれど、ほかにやりたいことも見つかっていませんでした。

そんなとき、塾の先生から「これからは生物学の時代だ」とアドバイスされたります。確かに、その後バイオテクノロジーの研究が急速に進み、「ネイチャ」や「サイエンス」など名だたる科学雑誌が生物学の記事にふれていたります。けれど、ほかにやりたいことも見つかっていませんでした。

東大で修士課程まで研究を続けました。そこで、「社会へ出て多様な価値観に触れたい」「誰もやったことがない研究を成功させたい」という

気持ちが高まり、博士課程に

は進まず、サントリーに研究

職として就職しました。當時

考えていたのは青いバラをつく

ること。赤やピンクはあっても、

しかし、塾の先生のひと言がきっかけ

【過去の自分から質問】  
どうしてそんなにがんばることができたの？

となり、大学では生物学をやろうと決心し、東大理科II類に入学しました。

ただ1、2年生の頃はナイスサークルで活動したり、友だちを増やすなどして青春を謳歌していた時間が長かったように感じます（笑）。でも、それが無駄だったとは思いません。多くの人と接し、コミュニケーションの重要性を実感でき、視野も広がった。それは今の仕事にも確実に役立っています。



なと思っていました。だからこそ挑戦しようと思ったんです。お茶の研究開発部門なんとお茶の研究開発部……。

飲料メーカーにおいて、研究開発部は花形の部署なんです。実際、居心地は良かつたし、サントリーという会社の風上が好きでした。しかし、「このままいいのか」という悩みは頭の片隅にはずっとありました。それを職場の先輩に相談すると、「大学の研究室へ戻るのなら早いに越したことはない。会社に長くいるほどしがらみができる、辞めづらくなるよ」と背中を押してくれたんです。

わずか1年間のサラリーマン生活を経て、東大大学院の博士課程へ再入学。そして、「線虫の嗅覚」を研究テーマにしました。嗅覚研究の第一人者はすでにアメリカにいましたが、自分に

食い込むことができました。

も通うようになったのです。ですが、そこは東大寺

学園を通う生徒たちが集まる、知る人ぞ知る進学塾。私は数学だけを習っていたのですが、

高校卒業後の進路に悩む

理系の成績上位者は東大医学部を目指すのが当たり前。

当時の東大寺学園にはそんな空気があり、私も学校の先生から医学部受験を勧められました。ただ、学校の成績だけで医学部を目指していくものか迷ついて……。けれど、ほかにやりたいことも見つかっていませんでした。

そんなとき、塾の先生から「これからは生物学の時代だ」とアドバイスされたります。確かに、その後バイオテクノロジーの研究が急速に進み、「ネイチャ」や「サイエンス」など名だたる科学雑誌が生物学の記事にふれていたります。けれど、ほかにやりたいことも見つかっていませんでした。

東大で修士課程まで研究を続けました。そこで、「社会へ出て多様な価値観に触れたい」「誰もやったことがない研究を成功させたい」という

気持ちが高まり、博士課程に

は進まず、サントリーに研究

職として就職しました。當時

考えていたのは青いバラをつく

ること。赤やピンクはあっても、

しかし、塾の先生のひと言がきっかけ

自分で物事を判断し  
信念を持って行動する

東大で修士課程まで研究を続けました。そこで、「社会へ出て多様な価値観に触れたい」「誰もやったことがない研究を成功させたい」という

気持ちが高まり、博士課程に

は進まず、サントリーに研究

職として就職しました。當時

考えていたのは青いバラをつく

ること。赤やピンクはあっても、

しかし、塾の先生のひと言がきっかけ



かできない解析をしようと考え、一つの論文をまとめました。それが「ネイチャ」に掲載され、博士号を取ることができたのです。

ほとんど線虫研究者は、線虫をメカニズム解明の対象としかとられておらず、研究成果を社会に役立て、新たなビジネスモデルを形成するところに興味を持つていないよう感じました。

日本人研究者に関して言えば、人と同じことをやって安心したい人が多いようにも思いますね。教科書通りにやつて結果が違うと、「失敗したのは自分の手順や配合に問題があったからだろ」と考え、何度も教科書通りのやり直しを繰り返す。しかし私は「予想したこと」と考えて取り組むことです。

実は私自身、その姿勢がぶれたことがあります。それは、自分の考え方を専門家に委ねのではなく、信念を持て取り組まなければ成果に結びつかないと痛感しました。

もう一つ、大にしていることがあります。それは、自分の考え方を他人に伝え、共感してもらうこと。すると仲間が増え、夢の実現に近づいていくのです。小学生のみんなにも、自分の夢をはつきりと周囲に伝えられる人になつてほしいですね。



■ 千葉県柏市にある中央研究所内の様子。■ 小児ガンの子どもとその家族を支援する一般社団法人と合同会社を設立。その記者会見の様子。■ 会社の仲間たちとのバーベキュー。



【今の自分が答える！】

他人と違うことを恐れなかつたから。

自分なりの考え方を大切にし、

周囲にもそれを伝えた。

ていました。だからこそ挑戦しようと思ったんです。お茶の研究開発部……。

飲料メーカーにおいて、研究開発部は花形の部署なんです。実際、居心地は良かつたし、サンタリーという会社の風上が好きでした。しかし、「このままいいのか」という悩みは頭の片隅にはずっとありました。それを職場の先輩に相談すると、「大学の研究室へ戻るのなら早いに越したことはない。会社に長くいるほどしがらみができる、辞めづらくなるよ」と背中を押してくれたんです。

わずか1年間のサラリーマン生活を経て、東大大学院の博士課程へ再入学。そして、「線虫の嗅覚」を研究テーマにしました。嗅覚研究の第一人者はすでにアメリカにいましたが、自分に